



財政担当理事  
藤野 恭子

専務理事  
渡邊 千香子

副会長  
佐川 きよみ

東部地区理事  
佐久間 あゆみ

会長  
山元 恵子

Round  
Table

01

理事 座談会

## 新型コロナウイルス感染症 対応支援に奔走した1年 そして未来の看護のあり方を見据えて

新型コロナウイルス感染症の感染拡大という未曾有の事態に直面した令和2年。東京都看護協会では危機管理室内に「新型コロナウイルス感染症対策プロジェクト」を立ち上げ、外部の専門家をアドバイザーとして招聘し、さまざまな角度から現場の支援に取り組みました。

今回は改めて令和2年度事業を振り返ると同時に、令和3年度以降の活動に向けて語り合います。



## 看護協会に求められた新たな役割 一歩踏み出したことが突破口に

——— 山元 恵子 会長

### 令和2年度は、看護職の応援派遣調整や 感染対策指導者養成研修など コロナ対策事業が軸に

**渡邊：**まずは、令和2年度事業の振り返りを山元会長からお願いします。

**山元：**令和2年度は、新型コロナウイルス対策支援に明け暮れた1年であったと言えるでしょう。東京都看護協会では東京都内の病院でクラスターが発生した際に看護職員の応援派遣調整を行いました。協会の事業として行うべき支援かどうかという点について、内部でも大きく意見が分かれました。ただ、実際に動き出すと突破口になり、やがて協会の働きが全国的にも知られるようになりました。それを受けて一般の方々や企業の皆さまからご賛同を得て、1億4,000万円超という大きなご厚意をお寄せいただいたことは本当にありがたかったです。それと同時に、私たちの取り組みが高く評価されたという自信にもつながりました。

全体を見ると計画外の事業ばかりでしたが、その都度理事会の賛同、承認を得られたことで力強く事業を進めることができました。

**渡邊：**令和2年2月に横浜港のクルーズ船での陽性者発生後、徐々に増加し始め、病院など各所でのクラスター発生へと広がっていきましたが、クラスターが発生する前から、協会として何かできないかという話が出ていて、理事が手分けをして病院に電話をかけ、現状について実態把握をするなどしていました。

理事として関わってくださっている皆さまのご意見も伺いたいと思います。まずは佐川さん、いかがですか。

**佐川：**私は東京都看護協会の令和2年度のコロナ対応が、

職能団体としてのモデルになるのではと思っています。いち早く看護師の応援派遣を調整したり、感染症認定看護師がいない医療機関でもコロナ対応ができるように研修を充実させたりと、体制を整えたことは本当に素晴らしかったですね。医療機関や地域の看護師への実態調査にも積極的に取り組み、さまざまなメディアで医療現場や看護職の現状を情報発信していましたが、こうした活動で都民の方の理解を得られたのではないのでしょうか。会長のリーダーシップのもと、一つひとつ取り組んだことが、確かな実績につながったのだと思います。

**渡邊：**藤野さんはいかがですか。

**藤野：**そうですね。会長を中心に東京都看護協会が一つになったと感じられた1年間でしたし、ある意味コロナはチャンスにもなったと感じています。コロナの影響を受け、ほとんどの研修が中止になったことで、これからどうなるのか心配でしたが、すぐにコロナ関連の内容に置き換え、オンライン配信などを導入しました。研修内容も小規模の病院や施設のニーズにもマッチしたもので、現場も助かったと思います。普段からやっている看護を自分だけで終わらせるのではなく、発信することの大切さも改めて感じました。

**渡邊：**東部地区理事の佐久間さんはいかがですか。

**佐久間：**コロナの影響を受け、さまざまな意見や反応がある中で大きく舵を切り、スピーディーにコロナ対応に切り替えたことは本当に大きな決断だったと思います。ただ、地区単位で振り返ると、従来の枠組みからの飛躍はできていなかった。地区の研修やまちの保健室のあり方など、もうひとひねり、新しい発想がほしかったと思いますし、自分を客観視してみても、地区支部の理事の力不足だったと感じています。

**渡邊：**地区理事の皆さんはご自身の所属施設を一番に考

## 令和2年度のコロナ対応は職能団体のモデルになる

——— 佐川 きよみ 副会長





## 情報発信に積極的に取り組む中で 予想以上の反響があったことが大きな転機となった

——— 渡邊 千香子 専務理事

えなければなりません。その上での地区支部活動ですので、力の入れ方も難しいと思います。東京都看護協会は、コロナプロジェクトを立ち上げ外部に情報発信をはじめたところ、予想以上の反響があったことが大きな転機になったと思います。このことが「今やらないと！」という意識につながったと考えています。

**山元：**ウェビナーやズームなどオンライン化を進めるにあたっては、システムエンジニアのサポートが必要でしたし、都内病院のクラスター支援に行った看護師が非常勤として入職したことも大きかった。さまざまな形で支援してくださる方がいたからこそ、私たちも安心して事業を進めることができたのだと思っています。

### 次年度は新たな視点からのコロナ対策、 看護職支援にも目を向けたい

**渡邊：**では、次に次年度の事業に向けて、山元会長からお願いします。

**山元：**新型コロナウイルス感染症の感染拡大も2年目に入り、これまでとは違う方法で事業展開していかなければなりません。研修や学会は今年も引き続きウェブで開催を続けていくと同時に新たな取り組みも考えています。

一つは看護学生が授業や看護研究にも使える学生学会を形にすることです。令和3年6月には「東京都看護学会誌第1巻第1号」を創刊しましたので、こちらにも力を入れていきたい。大学や看護学校の先生に論文を投稿していただければ、学術的な面での発展、進歩にもつながるのではないのでしょうか。

二つ目は地域に向けたアプローチです。昨年行った他の学会と共同開催した地域包括ケアをテーマとした研修にたくさんの方が参加してくださり、ニーズがあることがわかりました。今後は病院の看護師だけでなく、保健師や障害者支援施設、特別支援学級などで従事する地域の看護職に向けた施策も必要だと考えています。

**渡邊：**佐川さんはいかがですか。

**佐川：**医療機関におけるコロナ対策は、まだしばらく続くでしょう。私が懸念しているのは、10年前に新型インフル

エンザが大流行した際に起こったように、コロナ対応に追われた看護職が疲弊し、メンタル面も含めてさまざまな病気にかかるなどして、離職してしまうケースです。今後、何らかの対策が求められるのではないのでしょうか。

また、地域包括ケアにもさらに取り組んでいきたいと思っています。看護職が働く場所は医療機関だけでなく、障害福祉サービスや産業保健分野などにも広がっています。一方で、少数で働いている現場では人材の育成や、その場所で看護師としての仕事を確立するための支援が必要になると感じています。

**佐久間：**非常事態のための人員配置をいつまで続けるのか、悩みどころですね。

今回のコロナで感じたのは、ここぞというときに中小規模の病院でもすぐに取り入れられる研修内容が求められているということです。これまでに東京都看護協会で行ってきた研修がツールとして、地域や施設で、現場に合わせて改変されながら使われていくのが理想ですね。

**藤野：**目的が明確な研修にニーズがあることがわかったので、これから会員獲得をするためには、「東京都看護協会の研修に参加すると現場ですぐに役立つ」と感じてもらえるような内容を企画することは大切ですね。私たちが行ってきたことを可視化して、協会の魅力を広く周知することが、会員数を増やすことにもつながるのではないのでしょうか。

また、令和2年度は多くの方からご寄附をいただいたので、これをどのように活用するか、使い道についてきちんと発信することも重要です。

### 看護職の輪を広げることで、 一人ひとりの成長につなげたい

**渡邊：**いろいろなお話がありましたが、さらに皆さんが考える次年度の課題についてお聞かせください。

**佐久間：**企業で働く看護師など、外部との接点が少ない看護師の横のつながりを広げていくことが必要だと思っています。東京都看護協会に行けば情報があり、新たな知識が得られ、心休まる場所である……。そんな“知の拠点”になっていけたら。その点でも、オンライン研修は気軽に

## 看護を自分だけで終わらせるのではなく 発信することの大切さも改めて感じた

——— 藤野 恭子 財政担当理事



参加できて、有効な手段だと思います。

コロナが落ち着いても、医療現場はコロナ前と同じ状況には戻らないでしょう。今後、先駆的な取り組みができな  
い医療機関は淘汰されてしまうかもしれません。地域の医療を支えるためにも、地域包括ケアを担う委員会などが中心になって“ニューノーマル”を模索することが必要ではないでしょうか。

**山元：**私は、もっと生産性を高めないと日本の医療や看護は生き残れないと考えています。また、看護職の方々にはぜひ海外でも活躍してほしいですし、日本の看護のきめ細やかな対応やエビデンスに基づいたケアを海外に伝えてほしいと考えています。これらの支援の一環として協会では平成29年度から語学研修事業を実施しています。

**佐川：**今後、医療業界もどんどんIT、ICT化が進んでいきます。ナイチンゲールは「看護師は、看護師でなければできない仕事をやりなさい」と言っていますが、今後日本の人口が減り、少子化が進めば看護職も減るでしょう。IT、ICT化によって、看護職にしかできない仕事を整理することが求められると思います。

**佐久間：**今、仕事の8割を診療補助が占める“ミニドクター”のような看護師が多く存在しますが、医療の補助行為に特化しすぎることによって看護職としてのマインド、心が削られてしまうのではないかと懸念しています。避けたいのは、IT、ICT化が進んですべてが機械的になってしまうこと。医療機関は患者さんにとって温かさを感じる場所であってほしいですね。

**山元：**改めて“質の良い看護”とは何かということを考えるべきではないでしょうか。一人ひとりの看護職が、患者さんやご家族がこの病院、この施設に来て良かったと思えるような気配りや、目の前にいる人がより良い人生を送るに

はどうしたらいいか、包括的に考えながら看護ができる人に育ってほしいと思います。

## あらゆる場所で働く看護職が集まる “知の拠点”を目指す

**渡邊：**最後に、協会事業のあるべき姿についてのお考えをお聞かせください。

**山元：**東京都看護協会が、看護に関わる皆さんが入会したいと思ってくれるような団体であるために、常に先のことを見据えながら新しい情報を発信していくことが重要だと思っています。これからも“知の拠点”として、すべての看護に関わる人が集まる、エネルギッシュな場所でありたいですね。

**佐久間：**“知の拠点”という言葉に付随して、看護職が自分たちのアイデアやノウハウを協会に持ち込むとさらに広がっていく、次のキャリアプランがひらめくなど、視点が広がる場所になればいいと思います。また、いろいろな専門職とつながることができるハブ機能を持った、医療界のプラットフォームになればいいですね。

**藤野：**そうですね。職能団体として、全国の看護協会のモデルとして発信できるようになると、より活性化するのではないのでしょうか。

**佐川：**東京都内の看護職全就業者のうち東京都看護協会に加入している看護職はまだ一部のみです。あらゆる看護職が集う場所になるように、スキルアップのための研修や、コミュニケーションの場の提供など、新しい視点での事業展開や、情報発信をしていきたいですね。

**渡邊：**その時々さまざまな状況やニーズに合わせて、今後も皆さんのお力を借りながら、東京都看護協会としての事業を進めてまいりたいと思います。ありがとうございました。



## 看護協会がアイデアやノウハウが広がる場所、 ハブ機能を持った医療界のプラットフォームになれば

——— 佐久間 あゆみ 東部地区理事